

アチツクグマンズリー。

第 三 號
昭和十年九月廿日

OPINION

アチツク根元記 (三)

祭魚洞生

市川君がアチツク舊館を整理した際「A・M・S

日誌」なるものを見付出された。縦罫の帳面でアチツクの日記が記されて居る。書き出しは大正十年二月二日で今から見ると十五年程前である。當日の出席者は鈴木醇宮本璋、清水正雄、中山正則、田中薫、内山敏、及小生の七名、會場は本郷鉢の木、會費合計三圓六十錢話題は博物館、炭坑、天城山、丹那盆地成因、丹那トンネル、天城の猪人殺しとある。自分の記憶では之が第一回ではないと思ふが記録としては第一回の集會になつて居る。第二回が三月二日で此の時會の話や研究項目、分類法等の話に花が咲き終りに會の名をアチツクミニゼアムソサエティーとすべ

しとの議が出たが決定せず散會と見えて居る。次で五月二十二日に至り第三回集會に於て今後會の探るべき方針につき小生の話した要項が書てある。之を摘記して見ると(1)會の規定は不文律(2)標本寄贈は歓迎、但骨董的のものは避ける又一度寄贈されし標本は會と運命を共にするを原則とする。標本蒐集については年月日場所及その標本につき知れる所を名稱以外にも詳しく記載すること。會はレツテルを制定し寄贈者及蒐集者其他事項を明記する。(3)會自身が標本を蒐集する場合の目安と基金の必要(4)會員が標本を會に持ち込む時は會員各自が納得するを要し後になり所有權の有無を議論しないこと(5)會の事業、標本の蒐集、整理、研究、殊に玩具の研究、文獻の蒐集、特殊旅行案の作製、研究旅行発する旅行案、又先輩を招じて講話を聞く等(6)會維持と經費の問題(7)會の事務(8)入會は會員の紹介に

より且大多數の賛成を要し退會は自由(9)五月二十三日を本會の紀念日とす。此の後には會の日誌として會員の動靜、標本の寄贈、訪問者等につき記入して七月に至り暑中時期を省きて十月より大正十一年十一月迄切れ切れであるが會記が續いて居る。此の年の九月小生は英國へ趣いた爲大正十四年歸朝迄はブランクである。大正十四年十二月四日にアチツク復興第一回例會開催を機として又日誌は續く。此所で又會の方針が論議されて居るよくもまあ實行を御留守にして方針會議ばかりしてゐたもので、誠に以て方針オンパレードである。方針としては「チームワークとしての玩具研究」と大書されて居るから面白い。馬の玩具は佐藤弘と宮本璋、猿は鈴木醇と遊澤、獨樂は小林正美と渡部尙一、牛は江木盛雄、蛇が佐藤富治、履物が田中薫とある。之の最後のものは現今のアチツクへの萌芽である。十二月十日の項に主婦の友主催の「お人形展覽會」が駿河台で開かれた時依頼によつて五十點程出品した事が書いてある。此の展覽會には當時徳川喜久子姫で在せられた高松宮

妃殿ドがお出になつて御目に懸り恐縮したことを想ひ出す。十二月二十日に會名の件として爾今アチツクミニゼアムソサエティーを廢して Artic Museum と呼び日本字ではアテイック・ミニゼアムと書く旨を記してある。此處で想ひ出したが、此の前後神保小虎先生のを訪ねて種々の御話を承た末之の名の事が出て、その時面白い、いゝ名だがソサエティーはをかしい單にアテイックミニゼアムがいゝと教へられ成程と思つて此の會合に於て定めたのであつた。今用ひて居るアチツクミニゼアムは神保先生に依つて確定されたのであつた。日誌は未だ續くが以上が會名確定迄の概略でアチツクとしては神代上代に屬する。今後折々當時又は其後の記憶やら想出やら斷片的に記して見たいと思つて居る。(九月十二日記)

一 前號アチツク根元記訂正
第二段十五行の「關係に就て」は「於て」に訂正。
同段十六行の「分化作用」の次へ「異化作用」を挿入。
第三段廿三行の「勉強せねば」は「ば」に訂正。